どんな仕事にでも活きる基礎力を育てたい

二松學舍大学

（東京都千代田区）

夏目漱石や中江兆民、犬養毅、平塚雷鳥など歴史に名を残す一流の人々が同窓に名を連ねるのが二松學舍大学である。文学部・国際政治経済学部で培った人間性に、社会人としての意識を身に付けさせるため、同学キャリアセンターでは汎用性の高い資格の取得を学生に勧めている。秘書検定もその一つだ。秘書検定講座の取り組みについて、キャリアセンターの室井宏之氏に伺った。

東京の中心部にある二松學舍大学

汎用性の高い検定で幅広く社会に対応できる力を

都心ながら靖国神社と皇居の豊かな緑に囲まれた二松學舍大学は、喧騒とは無縁の落ち着いた雰囲気に包まれている。文学部と国際政治経済学部からなる同学は、学生数約3000人弱。135年以上という長い歴史を持つ大学だ。

キャリアセンターではさまざまな職種・職場で活かせる資格の取得を推奨しており、開講している講座はニュース時事能力検定やサービス介助士など汎用性の高いものばかり。秘書検定もその一つだ。

「今の学生は、空気は読むけれど口も手も出さない。そこからもう一歩出てほしいのです。空気が読めるのなら、次は何をするか考えアクションを起こしてほしい。恐らく学生には、やり方が分からないのでしょう。そのやり方を教えるためにも秘書検定は役に立つと考えています」。

こう話すのは、キャリアセンターの室井宏之氏である。

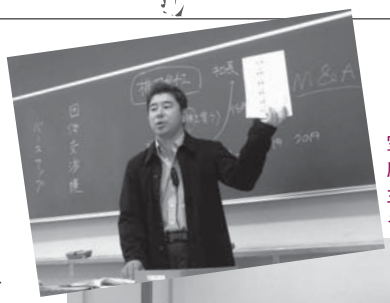
同学の学生の就職先は、一般事務・営業事務や管理業務などが多い。これらは電話応対、来客応対、窓口での受付など、人柄のよさと気配りが求められる職場。まさに秘書検定で学ぶことができる分野だ。

室井氏は途中、別の課への異動もあったが就職担当になって約20年。学生には当初から「就職面接でも役に立つし、どこへ行っても使える」と、秘書検定の受験を勧めていたそうだ。勧めるからには自分もやってみようと受験したのが17年ほど前。

「自分で勉強してみて、やはりこれはどんな仕事でも役に立つと思いました。しかし『受験してみたらどうか』と勧めるだけでは学生は自主的に勉強してくれません。それなら自分で教えればいいのではないかと考えたのです」。

そこで平成20年から秘書検定2級講座を開講し、自ら講師を務めている。開講してみると学生には徐々に浸透していった。年にもよるが、最近では毎年20～50名が参加している。

「学生は皆、資格を欲しがっています。この6年間指導してきて、学生の間で秘書検定は大分認知されてきたと思います。やはり3年次生が



室井氏が指導する秘書検定講座。女子学生がほとんどだが,自主的に参加して来る男子学生はやる気が違うという

室井氏のテキストと実問題集にはびっしりと付箋が貼られ,書き込みがされている

キャリアセンター事務部就職支援課の室井宏之課長補佐

文学部国文学科４年次生の田中美帆さんは２年次生のときに秘書検定２級に合格した

多いですが、1、2年次生も増えてきました」。

講座は全6回（1回80分×3コマ）。模擬試験、頻出問題解答会、個別フォローまで含めて、3000円で開講している。実は2年前までは無料で行っていたのだが、タダだという気安さからか、欠席が目立ったそうだ。そこで、時間とお金を掛けて学ぶ姿勢を持ってもらうため、有料にしたのである。「身が引き締まるのか、無料よりやりがいがあると、欠席する学生は減りました」と室井氏は言う。

職員と講師、意識を切り替えて指導

元から専門ではないため、教えるためにかなり勉強したと室井氏。指導法を開発するため、研修会などに参加してベテランの先生方と情報交換をしたり、他の資格試験の学び方を応用するなどさまざまな方法を取り入れてきた。講座で一番心掛けているのは、「キャリアセンター職員」と「講師」この二つの役割の切り替えだ。

「いつもはスーツですが、検定講座ではジャケットとパンツのスタイルで『講師の室井です』と名乗る。これだけでも学生は『いつもと違うな』という雰囲気を感じてくれます」。

講座では教材として、テキスト『クイックマスター』と『実問題集』（いずれも早稲田教育出版）を使用している。

講座で目標にしているのは、「状況をイメージする力を養う」ことだ。設問と選択肢を読んでも、その状況へ至るまでの理由や背景をイメージできなければ、解答するのは難しい。しかし学生は、経験したことのないビジネスの現場をなかなか想像できない。そこで、テキストでその理由や背景の部分を詳しく解説してから、問題に取り組ませるようにしている。

「解説がインプットで、過去問題がアウトプット。解説にあるそれぞれの理由や背景が、実際の状況になるとどうなるのか、またそれは検定でどのように出題されるのか。指導する側の私がそこをきちんと押さえておくことでより勉強の効果が上がると思います」。

秘書検定講座で学んだ学生たちは、マナーの面では他の学生の手本になる存在だ。2級講座ではあるが、〝資格ホルダー〟として恥ずかしくないよう実技も取り入れる。お辞儀や立ち居振る舞い、案内の仕方などは、口頭での説明だけでなく実際に体を動かして学ばせるのだ。

「短期間では身に付くまでには至りませんが、正しい形を実践してみることで今後意識するようにと伝えています」。

秘書検定を受験した学生にも話を聞いた。

文学部国文学科4年次生の田中美帆さんは室井氏の秘書検定講座を受講し、2年次生の11月に2級を受験した。

「3年次生の冬には就職活動が始まると考えたときに、ふさわしい話し方や接し方ができているか不安になったのです。社会人のイメージ自体が漠然としており、求められているものも分からない。秘書検定で勉強すればそれが少しは分かるのではないかという期待がありました」。

一番役に立ったのは、「効果的な話し方」。相手の意見を受け止めてから自分の意見を言うYes-But法や、物事を5W2Hで順序立てて話す方法は自身の話し方を振り返るきっかけに

最新事情㉜……二松學舎大学

なり、すぐに取り入れることができた。また、一般知識で略語などを学んだおかげでニュースなどを見て意味が分かるようになり、視野が大きく広がったそうだ。

しっかりと相手の顔を見て、よどみなく話す田中さん。「周囲の人からハキハキしてるね、と言ってもらえるようになった」と話す。

「以前は話し方にも迷いや不安がありました。周りに評価してもらえているのは秘書検定で学んだ成果だと思います。春からは商社の営業事務職に就く予定ですが、外で営業をしてくる方々に安心して任せてもらえるようになりたい。仕事に慣れたら、秘書検定も準1級、1級にも挑戦したいです」。

都心の小規模大学の特性を活かして、就職指導を行う

キャリアセンターでは、もちろん資格取得だけでなく就職全般をサポートしており、3年次生への就職支援講座には特に力を入れている。

春セメスターの講座では会社研究や自己分析を中心に心構えを醸成し、秋セメスターでは面接や筆記試験対策、スーツの着こなし、OB・OGや内定者の体験談などで意欲を高め、動き出すための素地を作る。そして就職活動直前には、マナー講座や女子学生のためのメイク指導、集団面接でのディスカッション対策などより具体的な内容で対策を行う。段階を追って意識とスキルを高めるのだ。

「キャンパスが都心部に所在するため、各企業から来ていただきやすいのは大きなメリット。就職活動直前の講座では、『採用担当者による面接特訓』を行っています。さまざまな企業の採用担当者に、面接のポイントをお話しいただき、併せて実技も行います。この講座には、毎年多くの学生が参加します。残念ながら職員が言っても学生には響かないことがあるのですが、実際に採用側の企業の方がおっしゃると説得力が違う。皆真剣に聞き、実技を行っています」。

また、一学年700人程度という規模の強みを活かし、3年次生には個人面談も行っている。

「例年11月ごろに行っています。本人が就職等についてどのように考えているか、今後どうしたいかを中心に聞いています。全体の傾向をつかむという目的もありますが、学生にキャリアセンター利用のためのきっかけにしてもらう狙いも。相談にきてくれてこそ私たちもサポートができる。面談はよい機会になっています」。

同学の学生について「就職状況は厳しいですが、総じてのんびりとした雰囲気。人物としてはよい評価を得ている」と室井氏。一方で「どうしても好きな者で集まりがち。内輪の同年代の間でコミュニケーションができればOKと思ってしまっている」とも言う。

「就職すれば幅広い年代の人と接することになります。今のうちに、失敗してでもいろいろなことに挑戦して、積極性を身に付けてほしい。本学で育んだ人間性に、社会に出て行くための意識が備われば、より多くの学生が積極的に社会と関わっていくことができるのではないかと思っています」。

社会に出るためのあと一歩の意味と重要性を理解してほしい。秘書検定がそのきっかけになれば、と室井氏は希望を語ってくれた。

就職講座では，ディスカッションや笑顔のトレーニングなどを行い，就職活動への意識を高めていく

さまざまな企業の採用担当者を招いて，面接の特訓も行う。大学職員よりも厳しい目でチェックされるため，学生も真剣に聞き入る